

2018. 12. 12 (水)

クリスマスの「スピリット」

Ruth M. Grubel

「金持ちは言った、『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』アブラハムは言った、『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」

(ルカによる福音書 16 章 30-31 節)

先ほど読んでいただいた聖書の箇所（ルカによる福音書 6 章 30～31 節）が、クリスマスに何の関係があるのかと皆さまは思われたかもしれませんね。生前とても自己中心的な人生を送っていたお金持ちの人が死んで地獄に行きました。そして、地獄で苦しい毎日を過ごしていたので、まだ生きている兄弟や家族にそのことを伝えてほしいとお願いをしたところ、死んだ人がそういう話をしても生きている人は聞き入れない、というお話でした。しかし今日は、死んだ人のメッセージもちゃんと効果があって、それを聞いて人生を変えたという、クリスマスの私の大好きな本のお話を皆さまとともに考えたいと思います。

A Christmas Carol の「スピリット」

この本は、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の『クリスマス・キャロル (*A Christmas Carol*)』です。ご存知の方も多いでしょう。著者のチャールズ・

ディケンズはイギリスの有名な作家で、この『クリスマス・キャロル』を書いたのは 1843 年でした。出版当初から大変人気があり、何度も出版されたそうです。イギリスではクリスマスを家族で祝う伝統が始まった時期で、いろいろなクリスマスの歌やデコレーション、お料理などが広がりました。そして、毎年クリスマスの時期に読まれる物語の一つとして、ディケンズの『クリスマス・キャロル』は知られるようになりました。後に日本にも伝わり、私が見つけた記録によると、初めて日本語に翻訳されたのは 1926 年のようです。いろいろな翻訳があるので、興味のある方はぜひ読んでみてください。

『クリスマス・キャロル』の主人公は、エベネザ・スクルージという人で、今、英語で「スクルージ」といえば「けちな人」という意味まで持つ有名な名前です。この人はクリスマスが大嫌いで、朝から晩まで自分の事務所で働いて金儲けをし、クリスマスに人に優しくしたり募金をしたりするなんて無駄な

ことだ、人の付き合いには何の意味もないと思っているととても冷たくて嫌な人です。ですので、物語のはじめに、恵まれていない人たちのための募金活動をしている人がスクルージさんを訪ねると、「お金を捨てるようなことだから、寄付しません」と言う場面があります。

ところが、スクルージさんはクリスマス・イブに夢を見ます。7年前に亡くなった自分のビジネスのパートナーであったジェイコブ・マーレイさんが夢に現れるのです。これは亡霊というのでしょうか。マーレイさんの体には鎖がたくさん巻きついていて、本当に苦しそうな顔で「スクルージ、あなたの生き方は正しくない。私は死んでから後悔してばかりだ。あなたは生き方を変えなさい。もっと人に優しくしなさい。あなたはもっとクリスマスを楽しみなさい」と言うのです。そして「僕の言葉を聞かないなら、これから訪れる3人の幽霊の話聞きなさい」と言います。

初めに出てきたのは、「過去」のクリスマスの幽霊でした。この幽霊は、スクルージさんに彼の過去のクリスマスを見せます。幼少の頃のクリスマスは寂しいものではあったけれど、姉がとても優しい人だったので、少しは楽しい思い出があったこと、そしてやっと就職した時の上司は優しい人で、スクルージさんを自分の子どものようにかわいがり、楽しいクリスマスを過ごしたことを思い出させました。

次に「現在」のクリスマスの幽霊が現れました。この幽霊は、今、クリスマスをいろいろな形で過ごしている人たちを見せました。例えば、スクルージさんの事務所で働いている書記のクラチットさんは、安い給料で朝か

ら晩まで働いています。この人は大家族で、体の弱い息子がいました。でも、みんなとても明るく、お金は無くても家族と一緒にクリスマス祝えるのは本当に素晴らしいと、少しのご馳走をみんなで準備して、楽しいクリスマスを過ごしていました。次に、たった1人のスクルージさんの親戚、亡くなった姉の息子である甥を見ました。甥はスクルージさんをクリスマス・ディナーに招待していたのですが、スクルージさんがそんなことはしたくないと断っていました。甥は叔父が来られないことを残念に思いながら、友達や家族と一緒にクリスマスをお祝いしていました。

3番目の幽霊は、「未来」のクリスマスの幽霊です。この幽霊は、スクルージさんに残酷な光景を見せます。布がかぶせてある遺体が、スクルージさんの家のようなところに置いてあり、家の中の世話をしていた女性と、いろんな配達をしていた男性が、「それは私が欲しい」、「いや、これは僕が欲しい」とスクルージさんの家の中の物を取り合っていました。幽霊はスクルージさんを墓地に連れていき、ある墓碑を見せます。手入れもされず、草がたくさん生えていましたが、そこにはスクルージさんの名前が刻まれていました。そして、またクラチットさんの家に行きます。そこには、体が弱かった息子のティムさんが栄養を十分に取れず病気で亡くなってしまい、悲しんでいる家族の姿がありました。

「ああ、本当につらい」。スクルージさんははっと目が覚めます。そして、クリスマスの朝は始まったところであることに気が付きました。「今日がクリスマスだ。何とかして楽しもう。何とかして他の人たちと一緒に過ごそう」という気持ちになり、甥に連絡しまし

た。「私はあなたのところのディナーに行きます。お願いします」。また、クラチットさんたちのクリスマス・ディナーのために、大きなご馳走をこっそり注文します。そして後の話ですが、クラチットさんの給料も上げ、ティムさんから第二の父と慕われるぐらい、いい関係を築きます。

この時からスクルージさんは、どれほどクリスマスが好きなのかを感じ、恵まれていない人々に自分の持っているものをできるだけシェアし、その人たちと一緒にクリスマスの喜びを分かち合えるようになりました。そして、スクルージさんこそロンドンで一番クリスマスを上手に祝える人になったということです。

私たち、そして、関西学院の「クリスマス スピリット」

『クリスマス・キャロル』は、クリスマスについて私たちにいろんなことを教えてくれます。悔い改めはいつでもできる。遅すぎることはなく、自分の生き方はいつでも変えることができる。そのために神様はイエス様を私たちにおくってくださり、私たちを救ってください。これがクリスマスのメッセージではないでしょうか。

神様は私たちをあるがままに愛してください

り、いつもよりよい自分があることを信じてくださっています。クリスマスは、神様がイエス様という贈り物を私たちにおくれたように、私たちも周りの方々に対してできることや贈れるものを考える時期だと思います。また、家族や友達の大切さを感じられる時期でもあります。大切なつながりに感謝し、クリスマスと共に迎える喜びに気付く時期ではないでしょうか。

私にとって今年のクリスマスは関西学院で過ごす最後のものとなりますが、関学は、まるでスクルージさんのように、クリスマスが一番体現する場所ではないかと思います。実は2013年に数えたことがあります。関学の中で参加したクリスマスのイベントは23回でした。しかし私が参加しなかったイベントも他にたくさんありました。日本中でも、世界中でも、関学ほどクリスマスを祝うところはないと思います。ですので、皆さま、この時期は、関西学院のクリスマスとスクルージさんが教えてくださったメッセージを少しでも感じ、互いに優しく、互いに心を広げて過ごしましょう。

社会学部のチャペルが、これからも大勢の人たちをインスパイアして、よりよい自分になれることを心から祈ります。

(社会学部教授・宣教師)